

叢書を結集してコロナに打ち勝とう！

# 川教組通信

No.5  
2021.7.2

川口市教職員組合 川口市本町1-5-14

048-224-2032 kawakyoso@ia9.itkeeper.ne.jp

## 職場アンケートから見えてきたもの

前例のないコロナ禍での学校教育がもう1年以上も続いています。

私たち川教組は昨年度末、川口の教職員を対象にアンケート調査を実施しました。アンケートからは、コロナ予防対策が日常化され、教職員の負担や不安が増大している実態が見えてきました。

「休日も含めて毎日検温するなど健康チェックを行い管理職に報告しなくてはならない。」 / 「教職員である自分が感染したらという不安が常にあり、通年緊張状態を強いられていた。」 / 「消毒作業、通常と違う授業展開など仕事量が増えた。」 / 「人手不足で休めない。」 / 「病休代替・産休代替さえ来ない。」 / 「タイムカードを押さずに休日出勤。仕事量が多く早く帰れるわけがない。」 等

コロナ禍の中で授業の形態は変わり、学校行事・給食指導・子どもたちの遊び方の指導まで、私たちの一日は息つく暇もありません。

また、ICTの活用により勤怠管理が正確になされ、そのことが働き方改革の基礎基本のはずです。しかし、45時間を超えると管理職から指導が入る、それを恐れ、タイムカードを早めに押した後に延々と仕事をするとといった実態があることも見えてきました。これでは本末転倒と言わざるを得ません。

## 文科省「#教師のバトン」に悲痛な声

毎日が忙しく過重負担を強いられているのは、私たち川口の教職員だけではなく、全国の教職員が同じ思いを持っているのです。そのことが文科省作成の「#教師のバトン」からもよく伝わってきます。

そもそも「#教師のバトン」は、文科省が教員希望者を増やすため、教職の魅力を伝えようとして立ち上げたサイトです。そこに皮肉にも現場の悲痛な声が次々に書き込まれているのです。

### 「#教師のバトン」(文部科学省)より

「出勤7時、退勤21時、休憩なし。もう限界です」  
「4月の超過勤務は100時間超。残業代は時給80円」  
「現場で削れる仕事はほんの一部。文科省が本気で動かないと、どうにもならない」  
「教科書が新しくなるのにその教科書に触れる時間が1秒もない」  
「機器の準備が忙しさに拍車をかけている」  
「新任教員が不調で出勤できず、他の教員が交代授業に。忙しすぎて新任教員に話を聞く余裕がなかった」  
「タイムカードを付けた後まで夜遅くまで残業している」  
「時短の制度はあるのに育休明けにとれるようになっていないのが現実」  
「22時30分退勤、タイムカード18時退勤」

長時間過密労働は、全国の教職員にとって早急に解決すべき喫緊の課題です。私たち教職員の健康を守らずして、川口の教育を守ることはできません。

## 管理職の人事評価申告に、問題あり

昨年度、市教委は市内校長に対して、自己評価シートに「不登校児童生徒の解消に向けた目標」「教職員の不祥事防止に向けた目標」の2観点を必ず入れるように示しました。それを受け、管理職シートには「不登校20%減」「4%以下にする」「不祥事ゼロにする・事故ゼロにする」等の目標が掲げられ、その達成度が校長の評価対象となりました。

皆さんは、管理職から「不登校をゼロにする」「何%以下にする」といったような数値目標を当初申告に明記するよう指導・あるいは強要されませんでしたか？ しかし、当初申告は自己申告が大前提であり、上から押し付けられる性格のものではありません。

不登校を減らすこと、ゼロにすることは私たちにとって当然の課題ですが、数値目標化することにそぐわない課題だとも言えるのです。不登校の原因は様々です。解決に向けて一人一人に寄り添いながら、手間暇かけて子どもたちと共に解決に向けて進んでいくものです。今年の取り組みが2年後に花開くこともあります。ですから、限られた期間に早急に結果が出るものではなく、一年間だけの結果によって数値評価すべきでもありません。結果だけを評価することになれば焦りが生じます。その焦りが、過日他県で起きた「児童を教師が無理やり車に乗せて学校に連れてくる」といった不祥事にもつながってしまうのです。不登校の解決に向けては、教職員の日々の取り組みや児童とのかわり方など、その努力とプロセスを評価すべきです。

